

### ヘーゲル『論理学』第二版の仮象論

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

64

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

2012-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007765>

# ヘーゲル『論理学』第二版の仮象論

山口 誠 一

## I 仮象論としての『論理学』

(A) ヘーゲル哲学は、迷走すら伴った生成途上の哲学であった。それは、ヘーゲルのいう絶対者についてもいえる。『論理学』に従えば、絶対者は、厳密な思弁的叙述ないし彫塑的叙述によって体系的に表現される (GW 21, S. 18; W 5, S. 31)。そして、『論理学』の体系的叙述は、絶対者の真理にふさわしい形式であるはずだった。したがって、そこに仮象が生ずる余地はないはずだった。『精神現象学』で仮象から意識をすでに解放していたはずだったからである。しかし、冒頭でのべたように、ヘーゲル哲学は、その生成の途上で『論理学』の体系的叙述を改訂する方向に向かったか、それどころか、絶対者にふさわしい体系的叙述そのものを解体する方向に向かったかしている。いいかえれば、意識を仮象から解放するという課題が依然として『論理学』にもあったのである。さらに端的に言えば、それを弁証法そのものが随伴せざるをえなかったのである。それが、『論理学』第二版における『精神現象学』の仮象論の行方だった。

ところで、絶対者の形式を持たない絶対者を、メルロ・ポンティは、透かし模様ともいうべき「仮象の絶対者」(PN, p. 91)と呼んでいる。そして、イッポリートを参照しながら、『精神現象学』の後、そのような絶対者は、二度とヘーゲル哲学には現れなかったとしている (PN, p. 88)。こうして、『精神現象学』における絶対者は、「仮象の絶対者」といってもよいし、それが自己吟味の否定的運動からも透けて見えてくる。また、ボルツは、『論理学』に従いながら、ヘーゲルのいう仮象を①反映としての仮象、②本質の現象、③存在の美的自己開示に分類し、透かし模様としての絶対者は、3番目の美的仮象にほかならないとした (GS, S. 48)。「美的仮象は——有限なるものにあの透明性を与える。つまり、有限なるものが現実の論理においてであるように——絶対者に自らを透かし見させるあの透明性を与える」(GS, S. 51)。

だが、メルロ・ポンティとボルツが見落としていたことは、仮象からの解放という課題は、『論理学』に継承されていることなのである。ヘーゲル自身も『論理学』第2書本質論・第3篇現実性・第1章絶対者で「端的に透けている仮象」(W 6, S. 188)に言及している。そこで透けて見えるのは絶対的同一性としての絶対者である。その仮象からの解放という課題は、ヘーゲル最晩年の哲学的遺書ともいえる『論理学』第二版序説からも一層判明するのである。

してみれば、仮象からの解放という課題を、『論理学』の外に『精神現象学』として設定するか、あ

るいは、『論理学』内部にも設定するかという両解釈が可能となる。さらに後者については、端初の存在と無についての仮象だけを、端初だということのゆえに『精神現象学』との連続的関係のゆえに認めるか、あるいは、『論理学』全体を仮象論として解釈するかという両解釈が可能となる。前者は、『論理学』第二版推敲説であり、後者は『論理学』の実質的改作説である。筆者は後者の解釈を採用している。そして、さらに、その実質的改作をヘーゲル自身は明言していないとするのか、筆者のように、『論理学』第二版序説で明言しているとするかに分かれる。

(B) そこで、本論考では、『論理学』第二版端初論で、『精神現象学』を前提しない場合の端初として表明されている語句「決意」が仮象からの解放を含蓄していることをまず解明する。絶対的端初としては、「恣意とも見なすことができる決意、思考そのものを考察しようという決意だけが現存している」(GW 21, S. 56; W 5, S. 68)といわれている。ここでの「思考そのもの」が、事象に内在してその弁証法を叙述する。そして、それを「考察しようという決意」とは、意志としての「思考自身による思考」である。ヘーゲルは、意志と思考を統一的にとらえているからである。さらに、刮目べきは、そのような決意=思考を「恣意とも見なすことができる」と規定していることである。したがって、本論考で注目するのは、まさに「恣意とも見なすことができる」という句である。この句は、端的に言えば、思考の意志が恣意でもある可能性を否定しているのではなくて肯定しているのである。たしかに、『エンツェクロペディー』に従うかぎり、思考は、主観的恣意を超えていて客観的で普遍的である。しかし、ヘーゲルは、『論理学』第二版序説で「思考の恣意」をはっきりと認めているし、それによって、『論理学』が思弁的叙述であることを相対化している。このことは、思考が意志でもあることからすればありうることである。なぜならば、『法哲学要綱』で、恣意としての意志は、自然的意志と自己規定的意志の中項であるとされていたからである(W 7, S. 66)。ただし、そこでの恣意とは、選択意志とも訳すべきであり、意志の主観性だけをもっぱら意味しているわけではない。

当該の決意は、たしかに一方で『精神現象学』の「自己を完遂する懐疑主義」(Phän. S. 61)を純粋学たる『論理学』の外部に前提することを否定しているように見える。しかし、当該の決意は、他方で、変容を受けた「自己を完遂する懐疑主義」が『論理学』の内部でも否定的方法として思弁的方法を補足することを実は表明している。その意味で『論理学』へと、『精神現象学』が継続している。このことは、『論理学』が、学的体系への導入でもあることを意味している。そのことを読み取ることができる箇所が、まさしく『論理学』第二版序説なのである。

(C) さて、ヘーゲルは、1831年11月14日午後5時15分に急死する。その1週間前の11月7日に当該序説を脱稿している。そして4日後の11日に、『精神現象学』第二版の出版契約を締結している。前日には、哲学史と法哲学の講義を情熱的に行っていた。したがって、当該序説は、ヘーゲルの最期の哲学文書になっている。問われるべきは、そこには、ヘーゲル最期の学的方法と体系についての展望が言語を基軸に示唆されていることである。そして、それは迷走であったのか完成への途上であったのか。このことが問われなければならない。というのも、『論理学』第二版といっても、書き直しを行った箇所は、第一書存在論だけなのである。それで、本質論は、用語に関してはむしろ第一版の存在論と符合

している。とはいえ、構成に関しても、すでに『エンツュクロペディー』の本質論が反省論を中心に大幅に変化していることからしても、ヘーゲルが急死していなければ大幅な書き直しがあっても不思議ではなかった。現にヘーゲルは、当該序説の掉尾で、『論理学』を77回推敲してもよい旨を表明している。「プラトンの叙述を引き合いに出すとすれば、近世において哲学的学の独立した建築を新たに築こうと苦心する者は、プラトンがその国家篇を7回書き直したという逸話に想到せざるをない。その想起は、この場合比較の意味もあると見てよいかぎり、その想起から一層切実に感じさせる願望は、著作が近世世界に属するものとして、現に一層深刻な原理、一層困難な対象および広汎にわたる材料を、仕上げのために眼前にしている以上、その著作を77回推敲する閑暇が欲しかったということである」(GW 21, S. 20; W 5, S. 33)。ここでは、なるほど、推敲という表現を使っているが第二版存在論の書き直しは、推敲というよりは実質的改作といってもよいほどである。

ここからして、ヘーゲルのいう推敲を額面通りたんなる推敲と解するか、あるいは実質的な改作と解するかについては、見解が分かれる。前者の推敲説の代表としては、ガダマーやイエシュケを挙げることができる。ガダマーによれば、『論理学』は、カントに発する超越論的論理学の完成という点では揺るぎのない体系なのである(HD; S. 66)。たしかに、最初の存在と無を区別するのは、思弁的思考ではなくて思いなし(Meinung)であることが、『論理学』第二版で付言されている(GW 21, S. 79; W 5, S. 95)。しかし、ガダマーによれば、それは、端初が『精神現象学』と『論理学』との接点であるがゆえに生じたことである。したがって、それ以降の叙述では思いなしは生じないという(HD, S. 76f.)。イエシュケによれば、ヘーゲル哲学体系は、著作における体系と講義における体系に大別されてから、前者の体系としてかろうじて成立しえたのは『論理学』だけなのである(HH; S. 390)。たしかに、『エンツュクロペディー』第一部の論理学との間に大きな違いが見られるが、『エンツュクロペディー』が講義テキストにすぎない以上、著作としての『論理学』と同等に見るわけにはゆかないという。

これに対して、後者の実質的改作の代表としては、シュルツとトイニッセンを挙げることができる。シュルツは、ガダマーやヘンリッヒの端初論を検討する過程で、思いなしは、『論理学』全体で働いているとしている(SH; S. 375)。さらにトイニッセンによれば、『論理学』第二版は、仮象批判を伴う批判的叙述であり、仮象批判という点では『精神現象学』と変わらないのである(SS, S. 82)。筆者も、この立場をとる。

## II 『論理学』第二版序説における仮象批判

しかし、トイニッセンは、『論理学』が何故に思弁的叙述たりえなかったのかという問いを閑却している。その問いへの言語論上の返答は、ヘーゲルが思弁的叙述を古代的な対話に立脚させながらも、そのような対話が近世にあっては実現できないとした諦念にほかならない。ヘーゲルは、思弁的弁証法にもとづく体系的叙述を「彫塑的叙述」と呼んでいる。推敲説をとったガダマーは、それを超越論哲学の完成と解釈し、対話的弁証法に對置している。しかし、ヘーゲルは、当該序説で、彫塑的叙述は、彫塑

の精神を体現する対話者によって実現するとしている。「彫塑的叙述は、それを聞く者と理解する者の彫塑的精神を必要とする。自分一個の反省や思いつき、したがって自分流の考えを他人に示そうとばかりするようなそれを冷静に自制することのできる彫塑的な青年や大人、あるいはプラトンが描いているような、ひたすら事象に随順して、それに耳を傾けるような者を近世の対話の中に登場させることはできまい。ましてや、その種の読者を期待することもできないであろう」(GW 21, S. 18; W 5, S. 31)。こうしてみれば、実質的改作とは、第二版において彫塑的叙述を意識的に断念した上で、その断念の範囲内で書き直すことなのである。

本論考も、実質的改作説を取りながら、さらにその方法論上の論拠を第二版序説に求め、仮象批判を『精神現象学』における「自己を完遂する懐疑主義」の変容と解する。このことに関連することは、いわゆる『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』第36節でものべられていた。「懐疑主義もまた有限な認識のあらゆる形式を貫いて遂行される否定的な学なので、同じく学への導入であることがはっきりするであろう。しかし、懐疑主義は、ただ喜ばしからぬ道であるばかりではなくて、すでにのべたように弁証法的なものはそれ自身肯定的な学の本質的契機であるのだから、余計なものだということになる」(GW 13, S. 34f.)。この引用文によれば、懐疑主義は、「弁証法的なもの」なので、肯定的な学の内部に契機として属するというのである。そして、さらにこうのべている。「このように懐疑主義を完遂せよという要求は、すべてのものへの懐疑が——というよりはむしろすべてのものへの絶望つまりすべてのもの全的無前提性が——たんに学に先行すべきだという要求と同じものである。この要求は本来、純粹に思考しようという決意のうちで、自由を通して、つまりすべてを捨象し、おのれの純粹な抽象状態すなわち思考の単純状態を把握する自由を通して遂行されているのである」(ibid.)。ただし、ここでは、懐疑主義は、思弁的叙述に内属しているとされているのに対して、『論理学』第二版序説の行文では、思弁的叙述に内属することはなく随伴していることになる。

周知のように『論理学』初版(1812)が、『精神現象学』を「学の体系第一部」として前提していたのに対して、『論理学』第二版(1832)は『精神現象学』をもはや前提しないまま、さらに『精神現象学』第二版も刊行するという形をとった。その際、「恣意とも見なされうる決意、思考そのものを考察しようという決意だけが現存している」(GW 21, S. 56; W 5, S. 68)は、『精神現象学』の懐疑主義の変容を伴う継続であると解釈すべきなのである。『論理学』の叙述は純粹な思弁的弁証法ではなくて、『精神現象学』の懐疑主義の変容ともいべき否定的契機を伴っているのである。ということは、『論理学』は依然として真理への形成陶冶の道としては『精神現象学』でもあるということである。「すなわち、精神は本質上意識であるから、この自己認識こそ精神の現実性の根本規定なのである。それゆえに、これらのカテゴリー、すなわちたんに衝動というかたちで本能に適合してしか働かないものであり、はじめは個々別々のかたちで現れ、したがって変化するものとして、また混乱したかたちで精神の意識に現れ、そのために意識に一個の分散的で不確実な現実性を与えるところの、これらのカテゴリーを純化し、それによってこのカテゴリーの中で精神を自由と真理とに高めることこそ、論理学の高次の課題である」(GW 21, S. 16; W 5, S. 27)。当該引用文末の「精神を自由と真理とに高めること」は、『精神現象学』

の課題でもあった。『論理学』初版の端初論冒頭ではこういわれていた。「純粹知が現象する精神の最後の真理・絶対的真理であることが結果として明らかになる、ということが精神の現象学、すなわち、現象する精神としての意識の学から、〔論理学の〕前提として受け入れられる」(GW 11, S. 33)。ちなみにこの文言は、第二版では、冒頭から後の段落へ移されている。ヘーゲルとしては、なるほど、つぎのような区別をしているのであろう。すなわち、『精神現象学』では精神が意識において真理に高まるのに対して、『論理学』ではカテゴリーにおいて真理に高まる。しかし、『論理学』も『精神現象学』と同じ真理への道であることに比較すれば、この区別は副次的である。

以上のことを見きわめる際に重要なことは、端初についての『論理学』第二版の叙述が純粹な思弁的弁証法ではないことである。その点についても、端初特有の事態と解するガダマーと、『論理学』全体に及ぶ事態と解するシュルツやトイニッセンとに分かれる。ヘーゲルは、たしかに『論理学』第二版の注釈で、純粹存在と純粹無とは「ただ思いなしにおいてだけ区別されているにすぎない」(GW 21, S. 79; W 5, S. 95) とのべている。ガダマーは、この思いなしについてつぎのように解している。「ところで、ここで、そもそも、思いなすということが話題になるということは奇妙である。というのも、思いなすということと、のべることのうちに実際に存しているものとの間の区別は、実際もはや『純粹思考』の論理学の主題の範囲には、(*Wissenschaft der Logik*. 1. Teil, Hrsg. v. G. Lasson, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1975, S. 78.によれば、『論理学』の『叙述のこの系列のうちには』)、はいらないからである。／論理学は、『内容』としての思考のうちに定在するものに関わり、この定[在するもの]の思想の規定を展開する。ここにおいてはもはや、思いなすことと思いなされるものという、現象学的な対立はいささかもない。論理学の純粹な思考は、まさに現象学的な弁証法の結果に依拠していたのである。したがって、思いなすことを論理学から排除することは、事柄として、自明の理である。もちろんそれは、思いなしのない思考が存在する、ということにはならない。[ここで]いわれるべきことは、ただ、思いなされることと、実際に考えられのべられることとの間に、もはや全然区別がない、ということなのである。わたしが何かを思いなそうと、のべようと、別の人がそうしようと、それはどちらでもよいことである。思考においては共通のことが考えられているのであり、この共通のことからは、思いなすことの私性がことごとく排除されているのである。『自我は、自己自身から純化されている』(*Wissenschaft der Logik*. 1. Teil, Hrsg. v. G. Lasson, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1975, S. 60)。／ところで、にもかかわらず、論理学のこの始まりにおいて、思いなすことに話が戻されているとすれば、それはもっぱら、我々が、ここではまだ思考の始まりにいるからである。別様に表現すれば、我々が、無規定なものとしての存在と無に留まっているかぎり、規定すること——このことが思考であるのだが——は、いまだ始まっていない、ということである」(HD, S. 76f.)。

このガダマー説に対して、トイニッセンは、シュルツを援用しながらつぎのようにのべている。「〔……〕ヘーゲルは、『論理学』で『精神現象学』をまったく経験の学としても動かしている。経験とはいってもその歴史的展開行程においてヨーロッパ的思考を集約する経験であり、理性的諸対象に関する現代的悟性的見方に表れている経験なのである」(SS, S. 83) と。ガダマーは、端初における純粹存在と純粹

無についての論理学的基本分析をそれに続いて構築される思想展開と対質させながら、その分析では依然として現象学の弁証法に属する思いなしが端初においてだけ優勢であると見た(*HD*, S. 76f.)。しかし、ルート-エヴァ・シュルツはガダマーに対して、つぎのような異論を唱えた。「『思いなし』は、論理学的端初に制限されてはいないのであって、それは、ヘーゲルが『論理学』では、思いなしに言及することをふだんは避けているとしてもそうなのである。避けているとしても、概念が経巡るすべての段階のうちには、『思いなし』に一致する段階と、『思いなし』に反する別の段階とがくりかえし存在する」(*SH*; S. 375)。

こうして、シュルツそしてトイニッセンによれば、ヘーゲルは、『論理学』のなかで、変容を受けた経験の学として『精神現象学』を営んでいることになる。それを、仮象批判とも規定している。要するに、トイニッセンにおいても、当該第二版序説で確認したように、『論理学』は、『精神現象学』と同じく、仮象から意識を解放して真理へ到達しようとする形成陶冶の道なのである。

ところで、この形成陶冶の出発点は、『論理学』においては、日常言語としてのカテゴリーである。この見地を補強する典拠が、フンボルトの「双数について」(1828年)である。フンボルトによれば、言語には世界観が宿っていて、双数という文法形式には、世界を二元性でとらえるという世界観が示されている。「言語にとってとってとりわけ決定的なのは、そこではほかのどこよりも二元性が重要な地位を占めるということである。すべての言語活動は対話にもとづいており、対話においては、語る人は、たとえ語りかけられる人が何人いようと、つねに彼らを単一なものと見なして彼らと向かい合う」(*ÜD*: S. 24)。このようにして、フンボルトによれば、言語の根源的本質は二元性であり、それは、思考の領域ではもっと根源的に根を張っている。「思考の法則や思考のカテゴリーの分類といった精神の眼に見えない有機組織においては、二元性の見地はもっとはるかに深くて根源的なしかたで根を張っている。つまり、命題と反対命題、定立と廃棄、存在と非存在、我と世界などがそれである。概念が三つかそれ以上のものに分類される場合でも、第三項はなんらかの原初的な二分法から生じてくるか、そうでなくても、頭のなかではこうした基礎に連れ戻されやすいのである」(*ÜD*: S. 23)。こうして、フンボルトによれば、二元性にもとづく思考形式は、言語の根源に通じているのである。そして、言語の中心に概念ないしカテゴリーが据えられる。ヘーゲルのつぎの言明も以上のようなフンボルトの言語論と同根なのである。「思考形式はまず人間の言語のなかに表出され、また貯えられている。人間が動物と異なる所以は思考にあるということは、今日ではまったく茶飯事のこととされている。人間の内心に起こるもの、一般に観念となって表れる一切、人間のもっている一切には言語が介入する。したがって、およそ人間が言語にし、言語に表すものはみな、不明瞭な形であれ、他のものと混合した形であれ、あるいは明瞭な形でであれ、カテゴリーを含んでいる。それほどに論理的なものは、人間にとって自然的なもので、むしろ論理的なものは、人間固有の自然そのものである」(*GW* 21, S. 10; *W* 5, S. 20)。この見地は、1831年夏学期の論理学講義でもまだ示されず、第二版序説で本格的に表明されている。

『精神現象学』の自然的意識に対応するのが、『論理学』では自然的論理である。たしかに用語としては、カントにも見られるが、意味は異なっている。ヘーゲルは、カントのいう自然的論理と人工論理学

という対を否定して、自然的論理と意識的論理学という対を主張している（GW 21, S. 13; W 5, S. 24f.）。自然的論理とは直接的つまり無意識的思考であるから、論理学を意識的に学ぶことによって思考の達人になる。「精神は本能的思考活動にあっては、思考のカテゴリーにつながれて限りなく多くの存在に寸断されていたのであったが、この精神を動かすものの内容が主観との直接的統一を脱して対象となって主観の前に現れるときそこに精神の自由が始まるのである」（GW 21, S. 15; W 5, S. 27）。ここで自然的論理のことを、本能的思考とも表現している。自然的論理とは、『精神現象学』の自然的意識を揚棄しているがゆえに、自然的意識を自己の契機として保存している。その際に『精神現象学』では、意識と対象の区別が、両者の同一性よりも優越している。それに対して、論理の自然本能では、意識と対象との同一性が、両者の区別よりも優越している。ということは、自然的論理は、自然であるがゆえにそれ自体としては、真理そのものではなくて、仮象を副次的に随伴しているのである。

なぜならば、仮象の随伴ということは、論理カテゴリーを意識化する行程が二段階になっているからである。つまり、形式論理学的カテゴリーの段階から、それを思弁的論理学的カテゴリーに純化する段階に進展するからである。前者の段階が不可避的に非真理の仮象を随伴している。その仮象の中心に、論理形式とその内容の分離という仮象がある。つまり、自然的論理を意識化したときに、それはさしあたって形式論理学となり、その仮象を不可避的に思弁的論理学の前提として利用しなければならない。そこで、つぎに論理形式と論理内容の分離を非真理として批判しなければならない。まず、ヘーゲルは、その非真理についてこうのべている。「もろもろの概念と概念の契機一般、とくに思考規定を、素材と異なるもので、たんに素材に付着するにすぎないような形式としてとりあつかうことは、〔形式〕論理学の対象であり、また目的である真理にふさわしくない態度であることが、そのこと自身からただちに明らかとなる」（GW 21, S. 16; W 5, S. 28）。つぎに、この理由を明示している。「なぜならば、思考規定をこのように内容と異なるたんなる形式と見なすことは思考規定に有限的規定だという烙印を押し、それ自身において無限的真理をとらえることは不可能だという規定をもつものにしてしまうからである。いかなる意味においてであっても、真なるものに制限と有限性が結びつけられるということは、その真なるものの否定の面、その非真理と非現実性の面を、あるいはむしろその終末の面を表すことであって、その真なるものの本性である肯定の面を表すことではない」（*ibid.*）。こうしてカテゴリーの非真理と非現実性の面を批判することが不可避となるのである。カテゴリーの形式と内容との分離という非真理は、形式と内容というカテゴリーそのものの批判に帰着する。「形式と内容という対立において、決して忘れられてならないことは、内容は形式を欠いたものではなくて、形式は内容に対して外面的なものであると同時に、内容は形式を自己自身のうちに持っているということである」（GW 20, S. 158; W 8, S. 264f.）。この根拠は、内容と形式の相互転化の法則である。それは、「内容とは、内容への形式の転化にほかならず、形式とは、形式への内容の転化にほかならない」（GW 20, S. 158f.; W 8, S. 265）という法則である。思考規定を形式から見た場合は、カテゴリーと呼び、内容から見た場合には事象と呼ぶのである。ヘーゲルによれば、カテゴリーの内容は、物を表現する意味ではなくて事象なのである。なぜならば、カテゴリーの内容は、言語記号と意味の恣意的結合を超えているからである。以上のことに



ついでにヘーゲルはこうのべている。「もっとも身近にしてもっとも日常の反省において、内容として形式から区別されるところのものも、実際は、たんなる形式を欠いたもの、規定を欠いたものであるべきではないということは、おのずからすぐにわかる。——もし形式を欠いているとすれば、内容はたんに空虚なものであり、物自体といった抽象体にすぎないであろう。——むしろ内容は、それ自身の中に形式を持つものであり、形式によってだけ生命と実質が与えられる。のみならず、また、内容としての仮象に転化するとともに、またこの仮象に即して存在する外的形態としての仮象に転化するものも、実にこの形式そのものにほかならない。このように、内容を論理的考察のなかに導入するとともに、論理学の対象は物ではなくて、事象すなわち物の概念となる」(GW 21, S. 17; W 5, S. 29)。ここでは、やはり、形式も内容も分離されているかぎり、仮象なのである。ちなみに、ヘーゲルは、形式と内容の分離のほかに、無限性と有限性との分離、外面と内面との分離、媒介と直接との分離を挙げている。こうしてみると、仮象は、主観的論理学はむしろのこと、客観的論理学全体にも及んでいることが判明する。

してみれば、『論理学』は、この仮象を批判することを不可欠の課題とする。「それどころか、わたしは、あまりにもしばしばそしてあまりにも激しく攻撃された。しかも、その反対者というのは、かれらの攻撃や非難が持っているカテゴリーが前提であり、したがってこのカテゴリーはその使用に先立って何よりもまず批判される必要があるという簡単な反省すらしようとしないうる連中である」(GW 21, S. 19; W 5, S. 31)。カテゴリーをその使用に先立って批判するということは、ヘーゲルによれば、必然的に仮象の批判となる。「単純なものに問題を制限するということは、ただ単純なままにとどまることに満足しないで、それに何かと自分の反省を加えずにはおれない思考の恣意に対して、その自由な戯れの余地を残す」(GW 21, S. 19; W 5, S. 32)。『論理学』の無前提的端初である「恣意とも見なされうる決意、思考そのものを考察しようという決意」は、恣意の自由な戯れの余地を残している。「そこで、この〔端初を単純なものとして推奨する〕根本的態度は、何よりもまず、ただ原理だけを考究し、それ以上進んだ点に立ち入らないという正当な要求を掲げながら、実際にやることといえば、かえってそれよりも進んだ問題、すなわちたんなる原理とは別のカテゴリー、他の前提や偏見を持ち込むという反対のことをやるようになる」(GW 21, S. 19; W 5, S. 32f.)。仮象は、思考自身の正当な要求とは、反対の、原理とは別の前提や偏見にほかならない。このような仮象は、証明されることなく、「ただ主張され、独断的にいわれるだけ」(GW 21, S. 19; W 5, S. 33)なのである。このような仮象から自己を解放することによって身につくのが、思考の彫塑的態度であり、それは、『論理学』体系全体の叙述と学習を通して形成され鍛錬される。そして、身につけるためには、そのような仮象が真なるものかどうかを探究する論理的思考が働くのである。ここでの論理的思考は、独断を批判する懐疑にほかならない。そして、これは、「自己を完遂する懐疑主義」の変容にほかならない。

ヘーゲルによれば、近世的意識が彫塑的精神にすぐ到達できないのは、「近世意識に特有の動揺と散漫さ」(GW 21, S. 18; W 5, S. 31)のためである。彫塑的精神は、事象の外にある主観的思いつき、つまり主観的観念や勝手な考えを冷静に自制し、防ぎ過ぎけようとする否定的反省を必然的に行使することができる。ところが、近世にあっては、内在的で単純な展開行程に主観的おもいつきが偶然に介入す

るだけではなくて、これを避けようとする努力も偶然なのである。これは、『精神現象学』における意識経験の生成の偶然性とも符合する。

彫塑的叙述こそ純粹学であり、アリストテレスのいう「自由な学」としての形而上学を継承する。「いかなる対象の叙述も、その必然性にもとづいて行われる思考展開の叙述ほどに厳密で、あくまで内在的で彫塑的でありうるものはほかには絶対にないであろう。まだ他の対象は、それほどにこのような要求をもたないであろう。思考学は、この点では数学をも凌駕するといわなければならない。というのは、いかなる対象も自己自身のなかに、思考学が持つような自由と自立性を持たないからである」(GW 21, S. 18; W 5, S. 30)。ここでの自由とは、自立性と関連している。しかし、思考は、自由な意志であるがゆえに、恣意の自由も随伴しているのである。ヘーゲルは、晩期にそのことを痛感している。まさに『論理学』が自由で自立していることを目指すがゆえに、思考の恣意による「自由な戯れ」ともなるのである。ここでの自由とは、勝手ということなのである。思考が一方では、内的必然にもとづく自立性を実現するためには、他方で偶然とはいえ随伴する勝手な外的反省の仮象を批判しなければならない。

#### 引用略号

- GW: Georg Wilhelm Hegel, *Gesammelte Werke in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*. Hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff. (GWの後に巻数と頁数を記してある)
- W: Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Werke in zwanzig Bänden. Auf der Grundlage der Werke von 1832-1845 neu editierte Ausgabe*. Redaktion Eva Moldenhauer, und Karl Markus Michel, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag, 1969-1979. (Wの後に巻数と頁数を記してある)
- Phän.: G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (1807). Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.
- GS: N. Bolz, *Eine kurze Geschichte des Scheins*. Wilhelm Fink Verlag, München, 1991.
- HD: H.-G. Gadamer, *Hegels Dialektik. Sechs hermeneutische Studien*. J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 2., vermehrte Auflage, 1980.
- HH: W. Jaeschke, *Hegel-Handbuch. Leben-Werk-Schule*. 2., aktualisierte Auflage, Verlag J. B. Metzler, Stuttgart/Weimar, 2010.
- PN: M. Merleau-Ponty, *Philosophie et non philosophie depuis Hegel(I)*. Notes de cours, Texte établi et présenté par C. Lefort, In: *Textures*. Vol. 8-9, Éditeur responsable, M. Richir, 1974.
- SH: Ruth-Eva Schulz, »Sein«in Hegels Logik: »Einfache Beziehung auf sich«. In: *Wirklichkeit und Reflexion [Festschrift für Walter Schulz]*. 1973, Pfullingen.
- SS: M. Theunissen, *Sein und Schein. Die kritische Funktion der Hegelschen Logik*. suhrkamp taschenbuch wissenschaft 314, Frankfurt am Main, 1980.
- ÜD: W. v. Humboldt, Über den Dualis. In: Ders., *Schriften zur Sprache*. Reclam, 1973, Stuttgart, S. 21ff.